

少年はGのジエネレー  
ションを夢見るか

轟音

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第二次世界大戦時より今とは異なる歴史を歩んだ世界、大東亜同盟は人型機動戦車な  
る兵器を実戦投入、多大な戦果を挙げその勢力を大きく拡大させる。

対するユニテツドも人型兵器の開発及び導入を行い、それらの兵器はモビルスース  
(MS)と呼ばれた。

休戦条約が結ばれて十数年後、大東亜同盟のコロニーに住む名家の子息である最上亮  
は、テロリストによる襲撃に巻き込まれる。

テロリストに撃たれた父の遺した言葉「Gの意思を継げ」という言葉と共に、亮はテ  
ロリストが乗っていたMS:ガンダムを奪いその身を戦場に委ねて行く。

それと時を同じくして、亮の双子の弟、悠は叔父に連れられて地球の研究所で謎の機械に触れる。『G・ジエネレーション・システム』と書かれたそれにマスターに選ばれてしまつた悠は、自らの出自やこの世界の真相を知つてしまう。

2人の兄弟の戦いを描く創作ガンダムストーリー。

5機のガンダム襲来  
(前)

目

次

# 5機のガンダム襲来（前）

皇暦2851年 4月1日

地球から遠く離れた宇宙入植用擬似惑星：通称スペースコロニー。  
数あるスペースコロニーの中でも最も一般的なシリンドラー型と呼ばれる長い筒のよう  
な形状のそれらは、1基辺り200万から500万人の居住を可能としている。

地球圏から最も近い大東亜同盟の宇宙領土である36基のコロニー群はかつての小  
国に伝わる神話の楽園から名を取り、ニライカナイ県という。約1億3000万人が住  
むそこは、地球と宇宙を繋ぐ主要な貿易港であると同時に、大東亜同盟の宇宙での軍事  
拠点だ。

ニライカナイ外周部の商港区画より内部は軍籍船しか立ち入る事はできず、民間は各  
コロニーから交差状に延びるエレベーターによつて移動している。そして民間コロ  
ニーに囲まれる中央の小惑星『ヤンバルクイナ』は、同盟のMSや宇宙艦船、電子機器  
の開発と生産を担つて いる軍需工場だ。

その『ヤンバルクイナ』から直近のコロニー、建設後『照屋』と地名を与えられたそ

の場所には280万人の住民がいる。因みにその殆どは工員か軍人の家族である。

『照屋』内のとある屋敷の寝室に、ジリリリリリ…と電子的なベル音が鳴り響く――それはベル音は1人の少年に朝を告げる為のものであり、快眠をばつさり切り捨てられた少年はベル音を鳴らす元凶にいつもの日課である恨みの籠つた一太刀を浴びせ目覚める。

「おはよう御座いますお坊ちやま、本日は高等部への入部式とのこと、正装もしなければなりませぬ故15分ほど時計の針を早めております」

お坊ちやまと呼ばれた少年：最上亮がベッドから見上げた先には、屋敷の使用人を束ねる侍女長であり亮の教育係でもある浅野がいた。

「…………後5分寝かせろ」

浅野の言葉を飲み込み状況把握した亮は、時間の余裕を見越して再び毛布に籠ろうとする…が――

「なりませんよお坊つちやま、貴方が後5分と言つて5分で済んだ記憶は御座いませぬ」包まろうと引いた毛布は既に浅野の左手で掴まれベッドから引き剥がされていた。開かれた窓から漂う風は肌寒く、毛布なしで寝る気にもなれない亮は二度寝を諦めざるを得ず：寝間着を脱ぎ換え寝室を出る。

「昨夜ですが高等部への入部式にお父様もいらつしやると、連絡がありました」

朝食にケチャップをたっぷりかけたスクランブルエッグを、トーストに載せて食して

いる最中に、浅野は言つた。

「それは本当か浅野！父さんが来てくれるのか!?」

亮の父は名門財閥最上家の党首、そして軍の技術顧問として多忙な日々で亮の住む屋敷へは月に1～2度戻つてこれるかどうかといったものだ。母を物心つく前に亡くしていいる亮にとつてはかけがえのない肉親であり、最上家の1人として：ヤマト人として尊敬する人物でもある。

「ええ、なんでも『ヤンバルクイナ』での仕事が一段落したらしく、入部式が始まる頃には搬入港に到着するそうです：あそこから学院までは1時間程度ですので、校長さんのお話がどんなに短くとも間に合うかと思いますよ」

校長先生の話が短い等、古今東西天地がひっくり返つても有り得ない事だがそれは兎も角、久しぶりに父と会えるのはとてもいい事だ。

亮は、憂鬱だった一日が途端に明るく幸せに感じられ、父との再会を楽しみにしていたのだつた。

：

ニライカナイ外周部の1つ『安慶那』の港に、1隻の大型艦が着艦した。

その大型艦は火星に水資源を輸送する為のものだという。しかし、その実態はユニテッドの隠密部隊を乗せた最新鋭のMS搭載艦である。その姿はただの大きいだけの輸送艦に偽装されているが、大東亜同盟の戦艦と互角に撃ち合えるだけの艦砲と、5機の最新鋭MSを搭載している。

ユニテッド：大東亜同盟と長く対立関係にある連合国は、本来休戦条約により軍隊の侵入が禁じられている。

条約を破るように二ライカナイに潜入しているかの部隊は、ユニテッドの宗主国の大統領の命令によつて結成された『G部隊』という。秘密裏に開発、製造された5機のMSのパイロットに選ばれたのは、まだ歳若いながらも未来のエースパイロットと称される3名の若者と、歴戦の猛者2名。

「おい！ジョナ見たか！港にはいる時横切つた管制塔のオペレーター!! 黒髪ロングの美女！巨乳!!」

宇宙での真空圧力に耐えられるよう設計された強化ガラスを叩きながら、大声ではしゃいでる若者、エリク・トンプソン。

「エリクうるさい…もうすぐ作戦本番…ミーティング終わつたら…すぐ出撃…」

淡淡と、抑揚のない声で冷静に喋るのは、話しかけられていた相手でエリクの同期ジョナサン・アルボリス。

「そういうなつて！戦前に華を愛でるのも興つてもんよ！お前も巨乳好きだろ、なつ!!」「つ仮にそだとしても：話すべき時と場がある…」

その2人の後方、エリクの大声は兎も角ジョナサンの声はギリギリ届かないといつた所では女性陣が屯つてゐる。

「フフ…仲がいいのね、私つたら知つてる子も同郷の人もいなかから…寂しいわ」2人の背を見つめる女性は、『白銀の魔女』の異名を持つベテランパイロットであり、

イスラム教徒の女性が肌を隠す為に身に付ける衣装、ブルカを着ているカーラ・アブヤドアン。

「まあ2人は学生時代からの友人らしいので、私も女性バイロットって殆どいないのでカーラさんと同じ部隊に所属できて光榮です」

カーラの横に立ち、心の底から嬉しそうに話すのは女性ながら軍学校を首席で卒業した期待の新人コシマ・クラウゼヴィッツ。

「おいガキ共！10分後にミーティングだ、バイロットスーツ着て集合しておけよ、1秒でも遅れたら帰還後一日雑用係！2秒なら二日、3秒なら三日だ！さつさと支度して来い！」

エリク、ジョナに指をさしながらバイロットの面々に指示をするのは最年長であり部隊の前線指揮を務める事となつたベテランの1人ジャック・ブラッグウッド。

彼らは皆各自に与えられた自室に戻ると、自分の身体に合わせて調整されたバイロットスースに肌を重ねる：そのパイロットスーツには、本来自分の軍属を示す軍章や階級章、兵士の所属コード等何も無く、飾り気のない真っ白なものだつた――

ニライカナイに潜入中のユニテッドの艦、その主であるシャルル・コナー艦長は、出航前大統領より命じられた指令を改めて思い出していた。

「二ライカナイにある、同盟軍のスーパーコンピュータの破壊…もしくはその管理者であるヒイロ・モガミの殺害…か」

シャルル艦長には、その指令はとてもじゃないが条約を破つてまで行うような内容とは思えなかつた：しかし彼は軍人だ、軍人は上の命令に一々疑問や不信を抱いては戦えぬものだ、彼は思考を切り替え、パイロット達を集めるミーティングルームに足を運んだ

亮は、浅野が運転する車でいつもの通学路を進み、先月まで通っていた学院の中等部

の門を通り過ぎる。そこから車で2分程度で、これから自分が通う高等部の正門に辿り着いた。別に中等部の方からでも高等部には行けるのだが、車ではこちらの方が早い。

「浅野…ありがとう、帰る時はまた電話するね」

「はい、御夕飯の仕度をしてお待ちしております、頑張つてらっしゃい」

浅野は最後にいつもの丁寧な口調を少しだけ砕けさせ、笑顔で亮を見送つていった。

「おーいりょーーこつちこつちーー！」

高等部の正門を通り、校舎と体育館が目に入ると体育館の方から自分に呼び掛ける声がする。声の主は旧友の翔一朗だ。

「おー翔一、つて…お前の正装袴かよ」

「従兄のお古だけどな！亮は背広似合つてんぜ、あつ…さつきクラス名簿見たけどな、俺らまた同クラス、成瀬と由美も一緒だ！」

「やつたじyan

その後も翔一朗と話しつつ、共に体育館に向かう、中には新一年生の座席が所狭しと並べられている。

「由美、亮連れて来たー」

「おはよう亮！もうギリギリじゃない、あと2分で開式するところよ」

着物を羽織った彼女、椎名由美は、幼馴染で翔一朗と亮3人で初等部の頃からいつも一緒に遊ぶ仲だ。3人は入学してから不思議な事にずっと同クラスで、席順を決めるクジ引きでもいつも近くの席だった。

由美は作曲家の父を持つ音楽一家の子女で、彼女も将来ピアニストになる事を志している。綺麗でいいとこの出の彼女は学院中の男から狙われており、翔一朗とは男子らから由美を護る、抜け駆けはしない事を誓つた仲である。

金城翔一朗は所謂母子家庭の子だ、彼の父は軍人だったが、先の大戦で戦死した：休戦が結ばれる昨日であったという。彼とは初等部の入部式であれこれあり、殴り合つて男の友情を築いて以来、兄弟の様に共に過ごした。

父のいない翔一朗と、母のいない亮：2人にしか分からぬ悩みや不安といった気持ちをぶちまけられる相手が幼き頃に見つかったのは、とても幸運だったのだろう。

『…であり、新一年生となる皆さんの中には中等部からの子や、他の学校からの新入生もいると思いますが…』

そうこうしている内に、式が始まり、校長が教台で長々とした挨拶を述べる。亮達は眠くなりそうな堅苦しい言葉の羅列に耐える苦境を、一年ぶりに味わう事となつた。

『G部隊』のパイロットの面々は、己が受領された機体にそれぞれ乗り込み、発艦用ゲートが開くのを心待ちにしている。最新鋭のMSと同時運用する事を前提として建造されたオベリスク級一番艦は、5機のMSそれぞれが同時に発艦できるよう側面に5門のゲートがある。

「作戦開始時間まで後115秒、さつきのミーティングのおさらいだ！俺のG—3とG—5エリク機は発艦後周辺のパトロール艦を蹴散らし、港を荒らして敵を惹きつける。G—1カーラ機はG—2ジョナサン機とG—4コシマ機を連れて中枢へ向かえ、『ヤンバルクイナ』内部に入り中のスーパーコンピュータを捜索し破壊しろ、先立つて潜入し

ている工作員によつてターゲット2『ヒイロ・モガミ』には発信機が仕込まれている筈だ、スーパーコンピュータが見つからなければ発信機を追つてターゲットを殺せ、我々はこれより軍属を離れテロリストとして行動する！絶対にしくじるな、死ぬな、捕まんな、それが無理なら自爆しろ、敵にこちらの情報を掴まれるな、Gが歯獲されるような事になつたら全員命はないと思え！」

ジャックの荒々しい言葉と共に、オベリスクはコロニーの港を出る。

速度を加速させるオベリスクは、管制塔が指示する進路を大きく外れ、二ライカナイ県内部に足を踏み入れた。

「「「了解」」

ゲートが開く、目の前に広がるは敵地：敵軍の一大拠点、そこをたつたの5人で、駆け巡る。

Gのパイロット達：特に3名の新兵らの緊張と高揚は、抑えきれず隠し切れない。「これが私の初陣、民間人を巻き込むかもしれない汚れ仕事、でもとっても重要で：危険な…G—4、いえ『ガンダム』私に力を――」

コシマの耳に、シャルル艦長からの命令が届く『発進！』

二ライカナイに、5つの閃光が走る